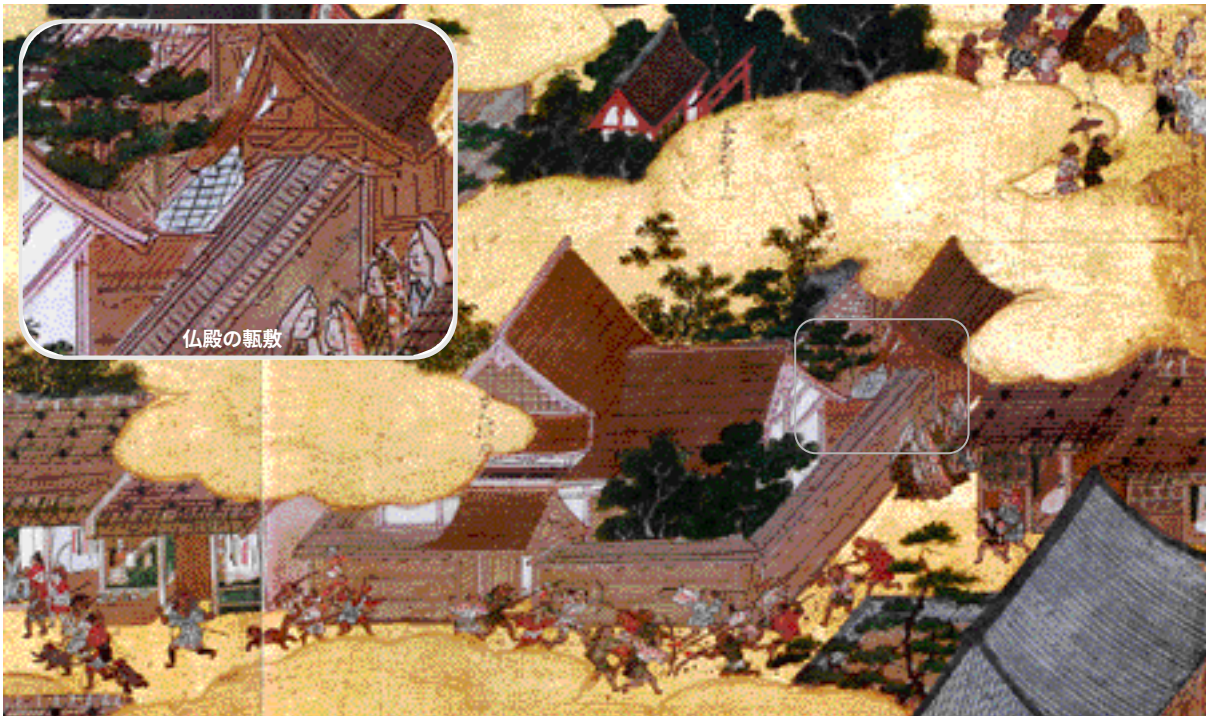
発掘ニュース56

洛中洛外図に描かれた甎

―曇華院跡の調査―

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



『洛中洛外図』に描かれた曇華院　「洛中洛外図屏風」米沢市（上杉博物館）所蔵（部分）

はじめに　昨年後半、東洞院姉小路南東にある元初音中学校敷地内で発掘調査が実施されました。この場所は、平安京左京三条四坊四町にあたります。

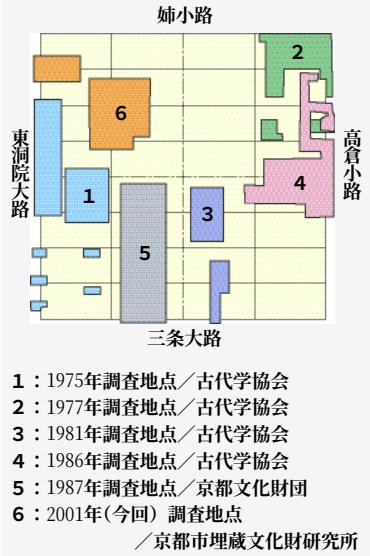
平安時代末期、以仁王（もちひとおう）の邸宅であった「高倉宮」が営まれ、室町時代以降には「臨済宗瑞雲山通玄寺曇華院（どんげいん）」が存在したことが知られています。

調査区南西にある井戸や土壙から、焼土や拳大の礫とともに多量の敷甎（しきせん）が出土しました。この井戸や土壙は、他の出土遺物から17世紀代前半に埋没していることがわかりました。今回は、曇華院とこの敷甎についてお話をすすめることにしましょう。

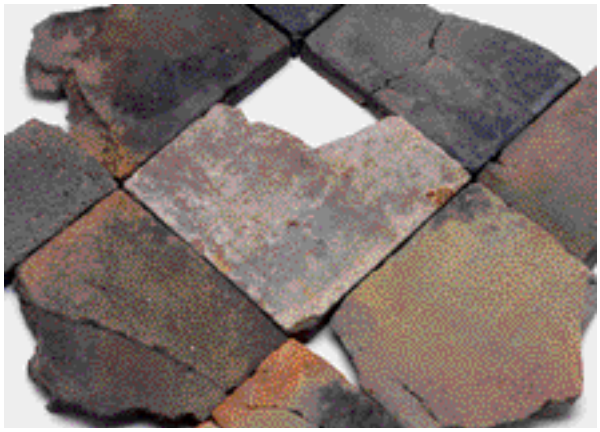
曇華院　曇華院は、足利二代将軍義詮（よしあきら）夫人の母、智泉尼が創建した通玄寺が前身とされ、尼五山の一つに数えられていました。文献によると、通玄寺は、14世紀後半には創建に着手されていたようで、康暦二年（1380）には仏殿の起工式がとり行われています。

智泉尼は、順徳天皇の曾孫にあたります。兄の無極志玄（むごくしげん）は、無窓疎石（むそうそせき）の弟子で、天竜寺を引き継ぎます。智泉尼自身も寺伝によれば、無窓疎石に師事していたとされています。通玄寺が臨済宗であった理由がここにあります。

また、出家する以前には石清水八幡宮の神官了清に嫁いでいます。高倉宮以後の左京三条四坊四町の土地は、石清水八幡宮の関係者によって、代々伝領され、引き継がれていました。開山にあたっては、ここからも援助を仰いでいたことは想像にかたくありません。



平安京左京三条四坊四町調査位置図



今回の調査で出土した敷甎

甎敷の例（東福寺講堂）

智泉尼が晩年に、境内の東に庵を結び「曇華」と号したことから、15世紀の末には通玄寺そのものが「曇華院」と呼ばれるようになっていたようです。

曇華院は、創建後、応仁文明の乱によって被災しますが、15世紀の終わり頃までには再興され、1487年には開祖智泉尼の百年忌がとり行なわれています。

大永七年（1527）に再び火災にあいますが、仏殿は焼亡をまぬがれたとのことです。天文二十一年（1552）、後奈良院の皇女秀聖尼が入寺し再興されます。慶長八年（1603）に三たび火災、寛文年間（1661～73）後西院の皇女聖安尼が入寺して再興、宝永五年（1708）の大火で焼失、天明八年（1778）類焼、さらに、元治元年（1864）「蛤御門の変」の兵火により完全に焼失してしまいます。以後再建されることなく、明治五年（1872）に嵯峨野に移転してしまい、当地での約五百年にわたる歴史に幕を閉じることになります。

敷甎　甎は広義には、煉瓦のことで、様々なものがあります。日本では、古くは古墳の墓室を形成する材料として使われたもの、古代の寺院・宮殿・官衙などの中枢建物の基壇化粧や床に貼ったりするもの、まれに蓮華文や鳳凰の文様が施された用途の判然としないものも見られます。

出土した敷甎は、一辺が24㎝前後の正方形で、厚さは約３㎝前後でした。中には表面がつるつるしているものがあります。仏殿の床に敷かれていて、その上を多くの人が行き来していたことがわかります。日々の勤行がこの上で行なわれていたものと思われます。

ところで、この敷甎には火を受けて変色しているものも多く見受けられます。出土した遺構にも多くの焼土が含まれていたことから、火災にあい、焼けて使い物にならなくなったものを井戸や土壙に投棄したものと推察されます。遺構の推定年代からすると、慶長八年（1603）の火災である可能性が高いと考えられます。

洛中洛外図　天正二年（1574）頃に信長が上杉謙信に贈ったと伝えられる上杉博物館所蔵『洛中洛外図屏風』の右隻のほぼ中央には「どんけいとの」として曇華院の様子が描かれています。

この洛中洛外図の描かれた風景の年代は、天文年間の末から永禄年間の前期（1550～60年代前半）のものといわれ、曇華院の姿もその頃のものと考えられます。後奈良院の皇女秀聖尼が再興した寺の姿であるといえます。

画面手前の東洞院通と三条通の交差点の北東部分に接したかたちで描かれています。三条通に面して総門が設けられ、東洞院通側にも小さな門があります。

よく見ると、総門から中に入ったところに、甎敷きの床が格子目状に表現されているのがわかります。この建物は、大永七年の火災で、焼け残ったとされる仏殿であろうと推測されます。

今回の調査で出土した敷甎は、慶長八年の火災の時に燃え落ちたこの仏殿のものである可能性が非常に高いと考えています。

むすび　洛中洛外図を介して、曇華院と関連する考古遺物が出土したわけです。「洛中洛外図に描かれているものが出土した」といっても過言ではないでしょう。これは過去の調査でも、曇華院と直接結びつく資料が報告されていないなかで、非常に重要な発見となりました。　（上村　憲章）